トレーナーになることにした。3年契約で

とくめい

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生→飛び級で大学入学→院進→人生に飽きてニート→理事長に頼み込まれてトレーナーになる話。

ウマ娘初視聴から２週間のニワカですが、勢い余って書いてしまいました。よって展開未定です。

追記・想像の１００倍ぐらい反応頂いており、非常にビビっています。感想、評価、誤字報告諸々ありがとうございます。励みになります。

目次

プロローグ　1
アグネスタキオン　10
アグネスタキオン2　24
アグネスタキオン3　35
アグネスタキオン4　46

プロローグ

汚い世界で生きてきた、という自負はある。

まともに職に就くこともなく、日がなギャンブルで小銭稼ぎに明け暮れる毎日。あるいは、酒と煙草に呑んでは呑まれる堕落した生活。人生の落伍者、と辞書で引いたら俺が類語で登場してもおかしくないだろう。

ひと昔前は前途多望な神童だの異才だの呼ばれたものだが、ここ近年もはや、その錆びついた才能は公営ギャンブルと違法ギャンブルにしか発揮されていない。

とはいえ俺は俺なりに人生をエンジョイしてきた訳で、ワンカップ酒と3級品でも煙草さえ嗜むことができればこのまま落ちこぼれて行っても何の異論もないのだが。

「そんな俺に今更、真人間になれって言っても無理だよ。やよいちゃ――理事長」

つらつらと並べられた言い訳に渋面を浮かべたのは、日本ウマ娘トレーニングセンター学園の現理事長である秋川やよい。実に数年振りの再会は、案の定俺の一人負けで始まった。

手に持った扇子をトントンと叩きながら、普段は快活なその瞳が困惑気に揺れる。

俺と彼女を挟んだガラス張りのローテーブルには、『特別嘱託制トレーナー雇用契約

書』。

その書類から視線を外して、明らかに上等な湯呑に口を付ける。

「指摘ッ。あなたの功績はそんなに生易しいものじゃない筈だ！　幾つの日本最年少記録を重ねてきたと思っている！」

「人格は才能に比例しないよ」

「この私が！　問題がないと言っているッ！」

端的に言うと、俺はスカウトを受けていた。

それも、このトレーニングセンター学園に所属するトレーナーとしてだ。本来は専門の養成学校を経て、学科試験に通った者だけが成れるエリート街道である。

そんなトレーナー職に誘われた俺がどう考えるかというと……答えはもちろん、ＮＯだ。今更まともなレールに外れるくらいなら研究者を辞めて半ニートにはなっていない。

ごくりと緑茶を喉に通してから、改めて俺は首を振った。

下手に話が長引いても面倒だ。正式に断って帰ってしまおう。

「確かに、向こうではウマ関連の研究をしてはいたけどさ。個人的な確認を行ったまでだよ」

「――【ウマ娘の運動生理に関する研究】ですか。従来的に人間と比されることの多いウ

マ娘について、四足歩行の哺乳類とのデータ比較を徹底的に行ったと聞いています」
横にいた女性に口を挟まれる。
理事長秘書の駿川（はやかわ）たづなさんだ。
黒いラインの入った深緑のスーツはどこか見覚えがあった。
「あー、最後に書いた論文ね、それ。ありがちなテーマだよ」
「……この論文で、ウマ娘の運動生理学研究が１０年は進んだとされていますが」
「へえ、それは初めて聞いたな」
げらげら笑っていると、小さな溜息が聞こえた。どうも呆れられた様子である。
しかし懐かしい話だ。当時、大学にいた頃はまだ、それなりに社会性と人生に対するやる気が残っていた頃で、件のそれを含めて何本かの論文を出したものだ。そういえばあれを書くのには随分と知己のウマ娘に協力して貰ったなあ。
まあ、とはいえ。
「俺のやりたいことはもう終わったのさ。誘いは有り難かったけど、出涸らしの身には過ぎた役割だよ」
肩をすくめてそういうと、理事長の眉がむむむと顰められた。
古い親戚の彼女から『どうしてもあなたの力が必要なんだ』と言われて重い腰は上げたものの、まさかトレーナー業務に就いてほしいだなんて言われるとは思ってもみな

かった。
　若いというより幼いと言うべき秋川やよいは、俺と違って日向に住む人間だ。そして、まだ歳こそ若いが今後の日本競バ界を牽引し得る稀有な人材だ。
　俺のような人間と血の繋がりがあることには同情するが、俺とは関係のないところで何とか頑張ってほしいものだ。
「否定っ。それでも私にはあなたが……！」
「大体さ、研究者とかコンサルの立場で呼ばれるなら、まだ理解できたけど、何で『トレーナー』なの？」
　一つ、疑問に思ったのはその点だった。
　確かに俺の経歴だけを見るなら、飛び級での大学進学から院教育まで進み、最終的に博士号まで取得した。在院中の論文も幾つか受賞したものもあるし、モノによっては未だに選考中のだったり、著書になったものもある。
　そんな人物を果たして現場指導職のトレーナーとして招集するだろうか？
「確かにトレーナー資格は修士に付いてきたけど、実務経験なんてないよ？」
「……それは、その」
　言い淀んだ理事長に代わり、口を開いたのはたづな秘書だった。
　薄く微笑みを浮かべていた彼女は、困ったように口元を歪めて俺を見やる。

「理事長は、今、新しい試みを考えているんです」
ほう、と相槌を打つ。
この学園の責任者たる彼女のことだし、一つや二つの新イベントを考えていてもおかしくはない。
続きを促すと、たづな秘書は声をひそめてこう言った。
「現段階で詳しくは説明できませんが……今年度から、競バ界に大きな変化があります。それは、このトレセン学園本部を中心としながら、界隈全体に多大な影響を与えるものです」
「ふぅン。それで人手がいるってこと？　それも特に最前線の、トゥインクルシリーズで」
「肯定！」
「しかしそれなら、なおのこと即戦力の方が良いんじゃ……って、界隈全体の変化ってことは地方からの引き抜きも厳しいか」
「ご推察の通りです。ただでさえトレーナー不足が叫ばれる現状で無理を通せば、中央地方間での軋轢を生みかねません」
……うーん。具体的に何をするつもりか知らないけど、準備不足じゃないの？　それ。

「否定はしません」
「たづな!?」
　驚愕ッ！　とショックを受けたようにやよい理事長が叫ぶ。
　昔から無鉄砲なところは変わらないな、彼女も。
「――ただ、人材が欲しいというだけじゃない！　『信頼できる』人物が近くにいてほしい！　そう思っている！」
　呆れるほど真っすぐに胸を張って、彼女は俺の目を視る。
　いっそ恥ずかしささえ感じるばかりのストレートな誘い文句を受けて、思わず俺も考え込んでしまう。言ってみれば、別に、断る必然性は最初からなかったのだ。断る理由は、有り体に言えば面倒だから働きたくない、の一言に尽きる。
　その上で多少は仲の良かった親戚の子供にどうしてもとお願いされれば、多少は揺れてしまうぐらいの情が俺にも残っていたようだ。
　大きく深い溜息をついて、たっぷり３０秒。
　ついでに煙草を吸おうとして、室内に灰皿がないことに気付くまでもう３０秒。
　じっと見つめる２人の視線に、負けたように俺は一つ頷いた。
「……特別嘱託ってことは、勤務形態は通常社員と違うよね？」
　今までの如何に断ろうかという声色が変わったのが見て取れたのか、理事長は喜色満

面に頷いた。
「肯定ッ！　特に出勤日や時間に決まりはないっ。ただし、週に一度は報告書が必要となる」
週報か。
まあ、毎日と言われないだけ十分ではある。
「なお、契約期間は3年間としている。これは先にたづなから説明があった新企画が軌道に乗るのが3年後の見込みだからだ。……けど、そこから継続して契約して欲しいとも思う！」
それは確約できないなあ。
……けど、3年ならギリギリ許容範囲かな。
「もしご希望であれば、3年後以降は研究職として契約して頂いても問題ありませんよ。当学園内であればご自由に、もしくは関連施設の研究室への斡旋も可能です」
随分と至れり尽くせりじゃないか。
確かに自分でも（書類上は）優秀な人物だと思っていたけど、それにしても融通がよく利く。
「当然ッ！　あなたの才能が在野に埋もれるぐらいなら、この程度は理事長の裁量ッ！」
力強く頷く彼女の髪が大きく揺れて、確固たる自信の基にこの交渉を行いに来たこと

が感じられる。そりゃまあ、理事長とその秘書が単独で面接してる時点でコネとは言え特殊だとは思ったけど。

……はあ。

この数年、屑みたいな人生を送っていたけど年貢の納め時らしい。

自分より年下の女の子がここまでするとは、やはりあの母親の血を引いてるだけあるな。

観念したように溜息を吐いて、暫く目を瞑る。１０秒ほど、覚悟を決めて。

「……断るつもりで来たから、印鑑がないんだ。サインでもいい？」

「ッ！　やってくれるか!?」

「本当は、今世では働く気はなかったんだけどね。とりあえず3年だけなら、やよいちゃん……失礼、理事長の顔を立てますよ」

「不要！　敬語じゃなくていいし、昔の通り、やよいちゃんでいい！」

「……雇用関係なんだからそうは行かないでしょう」

むむっ！と頬を膨らませる彼女を宥める。

俺は屑だし社会性はゼロだけど、社会道徳は守るタイプだ。何より、半分以上は理事長のコネ採用である俺が公私混同のような立場を取れば、彼女の立場そのものに悪影響を及ぼしかねない。

そのようなことをつらつらと語るも、未だに不満気な表情を浮かべている。
救いを求めるように隣のたづなさんに視線を向けると、彼女は落としどころを探ってくれた。
「少なくとも、業務時間外であれば大きな問題にはならないのではないでしょうか？もちろん、公的な場は別としてですが……」
「賛成っ！　気を遣われる方が辛いっ！」
「……まあ、やよいちゃんがそれで良いなら」
にっこりと笑顔を浮かべるやよい理事長は、快活に笑い声をあげた。
……他に人がいる時は敬語にしよう。
そして彼女は思いついたように理事長机まで走ると、そのまま俺の書類にポンと印を突いた。「ああ、そういえば苗字が一緒なんですね」……たづなさんの言う通り、俺も秋川ではあるけど、それはそれとして何かに引っかかる奴では？
「……うむ！　後は、こちらで記載した内容に問題がないか確認してくれ。たづな、控えを彼に」
「書類の偽造では？」
「――あなたが訴えなければ、問題なしっ！」
どういう企業コンプライアンスだ。

アグネスタキオン

『トレーナーになるのであれば、担当ウマ娘を決めなければいけませんね』

緑の帽子が揺れて、目の前にバインダーが置かれた。中を捲ると、ウマ娘ごとに各種データがファイリングされている。現段階での身体能力や人格診断結果、または練習レースのタイム、着順、1着順とのバ身差等、諸々。

ぺらぺらと捲っていると、出るわ出るわ名馬の名前の数々。

ＪＲＡ賞最優秀短距離馬であるサクラバクシンオー。デビューから１２戦、最多連続連対記録を持つダイワスカーレット。笠松から中央に移り、平成三強とも呼ばれた芦毛の怪物オグリキャップ。……相変わらず時代がバラバラだが。

「？　この子たちはいずれもデビュー前の筈ですが、よく御存じですね？」

「おおう、シンボリルドルフもいるのか。と来れば、もちろんナリタブライアンもいるし。マヤノトップガンもいるじゃん。阪神大賞典が見てみたいもんだな」

こりゃ日本競馬界のオールスターだなあと資料を流し読みする。いずれも競馬史界に名を遺した優駿ばかりだ。中には知らない名前もあるが。――いや、何でこの流れでハルウララがいるんだよ。

あえてか？あえてなのか？確かに人気馬ではあったけどさー。それでいうとレッツゴードンキなんかもいたりする？いない？

「……あのー？」

「心配無用ッ！　あの人は昔から集中すると人の話を聞かないッ！」

たづなさんが何やら疑問の声を上げているが、よくまあこれだけの逸材が集まったもんだと嘆息する。

これだけの名バがいて、そしてその知識を持っていて、彼女たちを活躍させてやらないなんてのはそれこそ嘘だ。この資料は借りてもいいのか？　と聞くと、俺の為に用意したものだから持って帰ってくれて構わないとのこと。

そこまで言われては、もはや俺にやるべきは決まっていた。

「……ま、何とかなるでしょ」

逆にこれで育成失敗しようもんなら、トレーナーの腕が悪いとしか言いようがない。

『トレーナーバッジがない以上、今日時点で出来ることはない。次週の選抜レースまでには用意しておく』と伝えて、彼は理事長室を後にした。扉が音を立てて閉まると同時に、秋川やよいは満足げに大きく頷いた。

ふふん！　と扇子を勢い良く開いて、横に立つたづなを見上げる。

「重畳、重畳！　３年後のＵＲＡ設立を前に、彼の力は必須だからな！」
理事長！と書かれた独特な扇子で自分を扇ぎながら高笑いをする彼女は、これまでの苦労を眼下に浮かべた。突如大学院から姿を消した彼を見つけるのにも時間が掛かったものだが、こうして実をなした今、全ては些末事と言えた。
「あのぅ、理事長。私は彼について詳しく知りませんが、少なくとも今まで、研究機関以外に所属していたことはないのですよね？」
「肯定！　彼は小学校卒業後、１２歳で単身アメリカに渡り、飛び級での大学入学！　その後もＳｕｍｍａ　Ｃｕｍ　Ｌａｕｄｅ……最優秀生徒として卒業し、そこからは大学院での研究を行っていたと聞いている！」
いわゆる神童、ギフテッドという奴だな！　とやよいは高らかに笑う。
兄同然の親戚が日本を離れた時は大層寂しかったものだが、それでも彼の地でのあの人の活躍を思えば誇らしい気持ちが浮かぶものだ。きらきらとした瞳でテレビニュースに流れる彼の姿を追いかけていた日々が脳裏に蘇る。
しかし、とたづなは心配そうに頬に手を当てた。
「もちろん、優秀な方だというのは存じておりますけど……いきなりトレーナーとして担当を持つのは難しいのでは？　彼も言っていたように、他の新人トレーナーさんのように養成学校で経験を積んできた訳ではありませんし」

正論だった。

彼はあくまでトレーナー資格を有しているだけで、専門的な訓練を受けていたわけではない。何せウマ娘の訓練には特別な知識や経験が必要となる。そう簡単に事が運ぶとは、どうしても思えなかった。

たづなが心配している点は、当然、理事長であるやよいも考慮済であった。

その上で『全く問題なく』彼がトレーナー業を勤め上げてスターウマ娘を育成し、ついでに理事長としての自分のタスクも一部負担してくれないかなー等と考えていた。秋川やよい、久しぶりに逢えた親戚のお兄ちゃんに掛かり気味。ワクワクよーいドンだ。

「問題ないと思うがっ。……とはいえ、たづなの言い分も理解はできる、か」

カチ、と扇子の閉まる音。

「結論ッ！　先の彼の発言では、少なくとも彼の担当が決まるのは次週の選抜レースの結果を見てから、ということになるなっ？　であれば、それまで私が直接彼への指導を行おう！」

「り、理事長が直々に、ですか？」

「良案！　私であればウマ娘のことも、このトレセン学園のことも承知している！」

いかにも良いことを思いついた！　とばかりに笑みを深める彼女に、たづなは頭を抱

える。いつも通りと言えばその通りだが、何とも突飛すぎる。
まあ、彼女がトレセン学園内のトレーニング施設を視察したり、時にはウマ娘やトレーナーとのコミュニケーションを取っているのは周知の事実なので、確かにその延長……と捉えることは出来るかもしれないが。
これは暫く大変な日々が続きそうだなあ……と、いつも通りの諦観を覚えたたづなは、そういえば、と疑問を口にした。
「何だか彼、デビュー前の子たちのこともよく知っていたようですが……理事長から何かお話されましたか？」

やたらと広いことを除けば、トレセン学園の作りは大学キャンパスに近いように思えた。敷地内中央には学舎が建てられ、それを囲むようにウマ娘達の走行コースや施設が全体に並んでいる。
トレーニングセンターと言えど、毎時のようにレースの訓練をしているわけではない。年代で言えば中高生の年ごろの子供たちが集まっているわけで、教育施設としての役割もこなしている訳だ。
現在時刻は昼前の１１時過ぎごろ。時刻的には一般授業が行われている筈だ。一部の教職員やトレーナーがぽつりぽつりと歩いているばかりで、ウマ耳を垂らした少女た

ちの姿は全くない。

「あっちが芝で、ダートはこちらと。で、トレーニング施設と、プールと食堂と……」

あちらこちらと徒歩で歩くには広すぎる敷地に、せめて自転車ぐらいは用意しようかと考える。

ただ、今、生徒の姿がないのは都合がいいと言えた。

早ければ次週には担当に付くかもしれない以上、校内施設は今の内に把握しておかなければならなかった。とはいえ、俺に見られたい子がどれだけいるか……という問題もあるが。ま、トレーナーが付かずにデビュー出来ない子達もいるくらいだ。極々一部の『トレーナー側が』競い合うぐらいの逸材でもなければ何とかなるだろう。

とりあえず暫くの間はどんな子だろうと基礎トレーニングになるんだ、コースも距離適性も一旦は考えずに、汎用的なトレーニング内容を練っていかないとな。

そんな考えごとをしているのが悪かったのか、校舎の曲がり角部分で軽い衝撃が俺を襲った。肩への軽い痛み。思わず腰を落とす。

見ると、栗毛が跳ねていた。

へえ、と思わず声を出す。白衣を着たウマ娘は初めてだ。

懐かしい恰好をしているな、と思った。

あちらの大学にいた頃は男も女も、彼女のように白衣でうろつく輩が多かったもの

だ。
「おっと失礼。少々考え事をしていたものでね」
　懐かしい瞳だ、とも思った。どろどろに濁りきった赤い瞳はエゴイストのそれで、問題児の香りしかしなかった。
「いやなに、こちらの不注意だとも。特に怪我をした訳でもなし、気にしないでくれ」
「そう言って貰えると助かるね……新人の職員君かな？」
「つい３０分程前にここのトレーナーになった者だよ」
　一般採用ではないが。
　ほう、と軽い喜びの色を含んだ声が聞こえた。
「なるほど、なるほど。――部外者であれば流石にどうかと思ったが、トレーナーであれば問題ないか」
「なんて？」
「いやなに、すこぅしばかり、君に協力してほしいことがあるんだがね」
「協力？　……論文でも書いてるのか？」
　彼女の瞳の色が一段と深くなったような気がした。
「うんうん。いやなに、健康な成人男性のサンプルが丁度欲しかったところなのさ。実証結果がまるで足りなくてねえ……」

用件を改めれば、つまりは彼女が進める実験に被験者となってほしい、とのことだった。

まあ、学者が研究に協力者を求めるのは珍しい話じゃない。

俺だって大学に在籍していた当時は人間もウマ娘も男も女も老いも若きも、そこら中から引っ張ってきてはデータを採集していた訳だし。逆に、校内で研究協力したことだって何度でもある。

確かに、彼女のようなウマ娘に取ってみれば人間男性のサンプルは限られているだろう。時間がない訳でもないし、協力するのはやぶさかでもなもないのだが……

「協力って、具体的に何をするんだ？　長時間拘束されるようなものでなければ問題ないが」

「うんうん！　そう言ってくれるか！　なあに、1時間もあれば終わるさ」

「具体的には？」

「私が作った新薬の臨床薬理試験だが」

「すまない、昼から用事があったことを思い出したよ。機会があればまた会おう……止めないでくれないかな」

「待ちたまえよ」

踵を返して全速力で走ったつもりだったが、2秒もしない内に肩を掴まれていた。ウ

マ娘特有の筋力で掴まれていれば僧帽筋がイカれてもおかしくないのだが、意外に人間として常識的な力での掴み方に留まっていた。
「まあまあ聞いてくれよ、モルモッ……トレーナー君。確かに私が作ったとは言ったが、安全性については十分配慮しているさ。何の問題もないと言っていいね――データ上は」
「ＩＲＢ（Ｉｎｓｔｉｔｕｔｉｏｎａｌ　Ｒｅｖｉｅｗ　Ｂｏａｒｄ）は立ってんのか？」
「はーはっは……何故研究の邪魔になる外部委員が必要になるんだい？」
頭のネジがぶっ飛んでるのか、そもそも締まる仕組みではないのか。
天下の中央トレセン学園は、どこに出しても恥ずかしい科学者を抱えているようだった。
「倫理観をドブにでも捨ててきたのか？」
「科学の発展には最も不要と言っていいものだねえ」
臆した面もなくけらけらと笑う彼女は明らかに異常者だった。自分のやりたいこと、調べたいことの為なら何を置いても優先してしまう類の生粋の研究者だ。
「断言するけど、アメリカで俺が見てきた研究者を含めて、君が最も狂っているよ」
彼女を一般の人間として扱うのであれば、国内身分的には高校生に当て嵌まるはずだ

が、少なくとも精神の狂気性に限れば一端の科学者と言えた。
そんな俺の口をついた言葉はもはやただの悪口だったが、俺の発言は少しばかり彼女の興味を引いたようだった。先ほどまでの狂気的な面を少し下げて、ふむと顎に手を当てた。
「米国で研究をしていたのか？　君、トレーナーじゃないのか？」
少し訝しげにこちらを見る彼女に、つい先ほど印を付いたばかりの書類を見せてやる。
「資格は持ってるし、雇用契約も済んでるさ。……バッジは今ちょっと持ってないけど、理事長決裁が済んだ雇用契約書ぐらいならあるぜ」
「ふむ……ん、んんん？　あれー？　秋川って君、あの秋川か？　アメリカのどの大学にいた？」
「――大の院だが。ああ、秋川っていうのは理事長と同じ苗字だが、遠縁の親戚ってだけで……」
何だか言い訳めいたことを口にしていると、彼女の両腕が一気に俺の両肩を掴んだ。先ほどまでの動きを止めるだけのそれではなく、一歩も動かさないぞという気概を感じる。
ふ、ふふふふっ！……と不気味な哄笑が聞こえる。ギラギラとした瞳が俺を貫いてい

るが、このまま両腕を付け根から引っこ抜くつもりだろうか。
　狂気の赤い瞳をそのままに、彼女の白衣がはたはたと揺れるのが目に入った。チラ見せするつもりだった筈の雇用契約書は彼女によって取り上げられ、舐め回すように観察されている。
「トレーナー任期が3年ということは、少なくともある1人のウマ娘がトゥインクルシリーズを終えるまではこの学園にいる訳だ、君は」
「まあ、そうなるな」
「それで今は、育成ウマ娘の目星を付けに来ているということかな？」
「いや、それは来週の選抜レースを見て決めるつもりだったが」
　今はただの校内見学でしかない。と伝えると、そこで彼女はようやく俺の肩から手を放してくれた。
「それで？　レースの優勝者でもスカウトするつもりかい？」
「出来ればね、そりゃ今後のトレーニング次第とはいえ、素質も大事だし。他のトレーナーもいるだろうし、どうなるかは分からないけど」
「トレーナーにとっては実績も必要、ということか」
「なにが？」
「ふぅむ、面倒だが、仕方ない……私も出るか。それで問題ないね？」

「いや、なにが?」

独り言のようにブツブツ呟いていた彼女はやがて、にやりとした笑顔を浮かべて、契約書に書かれた俺の名前を指でなぞった。怖いからやめてほしい。

「そろそろこの日本ウマ娘トレーニングセンター学園を退学になる頃かと思っていたンだが、ここで君と共同研究が出来るなら、多少の不便不都合を飲み込めるってことさ、ドクター秋川?」

ドクター、と呼ばれるのは明らかに久しぶりだった。そしてここでようやく彼女が俺の名を知っていることが分かった。

確かに在学当時はそれなりに名前も売れたし、幾つかの論文は機関紙に載っていたこともあるが……彼女からすると子供の時分の話じゃないのか? よく知っていたもんだな。

「ああ、何だ。俺の論文でも読んだか?どれも5年以上前に発表されている筈だが、意外に勉強熱心なんだな?」

「そりゃもちろん読むさ。近年のウマ娘の生理学、解剖学、基礎運動学……いずれも革新的な視点からの研究とその結果は実に興味深かったさ」

日本翻訳でも読んだのかと思えば、しっかり原著に目を通したさ、とのこと。翻訳者の知識レベルで正しい内容になっているとは思えないからねえと笑っており、その点に

おいては大いに同意する。そうだろうと笑って返される。
何とも久しぶりにする会話だ。この５年間は酒と煙草と博打しかしていなかったから、学術的な話など縁遠いものになっていたのだから。
「というか君の研究範囲を聞いていなかったが、俺の専攻分野に絡んでいたのか？」
「――ウマ娘の可能性の果てを追いかけているのさ、私は」
濁った瞳をギラギラと輝かせて、彼女は大きく身を引いた。白衣がはためいて、裾口からは色とりどりの試験管を覗かせていた。
確かに可能性の果て、という言葉には少し心を惹かれるものがあった。
例えば人間のスプリンターはごく限られた区間を時速４５ｋｍで走ることが出来る。しかし……理論上の限界は時速６４ｋｍ程度までなら、人体は耐えうると考えられている。
俺にはスプリンターの才能どころか走る才能さえないのだから、この理論を実験することは出来ない。だが、ウマ娘たる彼女が、その身をもってどこまで限界に近づけるのか、限界を超えられるのか……という点には、興味がないといえば嘘になる。
「君には是非、その共同研究者になってほしいのさ――ないし被験者に」
「モルモットになる気はないが」
「えー」

えーじゃないが。

しかしまあ、どうせ誰かの担当にはならなきゃいけないんだ。

「来週の選抜レース、楽しみにしてるよ。別に一着になれと言うつもりはないけど、――可能性の切れ端ぐらいは見せてくれよ」

「はーはっは！　その方が難しいんじゃないのか、君！」

確かにそうかもな、と笑い合って翌週のこと。

彼女――アグネスタキオンが2着ハッピーミークに3馬身半差を付けて圧勝したのを受け、俺と彼女は職員室で専属トレーナー契約を結んだ。

アグネスタキオン２

昼下がりの校舎一角は、ある種のどよめきに包まれていた。昨日から流れる噂話に、新人トレーナーからベテラントレーナーまで、あるいはウマ娘達までもが意識を奪われていた。

その噂というのは『あの奇人ぶりで有名なアグネスタキオンが選抜レースに出たばかりか、トレーナーと専属契約を結んだ』というもの。

彼女は以前よりその血筋や僅かばかりに見せていた実力の片鱗からデビューに期待が寄せられていたが、しかし、その実態はレースどころか授業にさえ真面目に出席しない問題児。

このまま行けばデビューどころかトレセン学園への所属さえ危ぶまれるのでは――と、一部から心配されていた矢先の出来事に、周囲はあれやこれやと想像を膨らませていた。

曰く「流石に彼女も退学は嫌だったから渋々契約したのだろう」とか。「今回のスカウトは腕が良かったのだろう」とか。はたまた「いつもの実験に失敗して性格が（まともな方に）ねじ曲がったのでは？」とか。

その真偽はどうであれ、少なくともこれだけは共通事実として認識されていた。
『翌月のメイクデビュー戦にはアグネスタキオンが出バする』と。

「そこまで。タキオン、水分補給後、インターバルを5分取る。次は腹筋トレーニングに移るぞ」
ランニングマシンが既定の距離を計測したところで声を掛けると、大きく息を吐きながら彼女は頷いた。ウマ娘用に特殊改良された学園のトレーニング用機器は、総じて運動強度が高い。現段階で完成とは言えない彼女の身体での長時間使用は故障に繋がりかねない。短時間かつ高密度のトレーニングが良いだろう。
「うーん。実に基礎的なトレーニングの比重が高いねえ、君の訓練方針は」
「これでも本来のジュニア級よりは高めの負荷を取っている。ただ、今の調子ならもう一段階トレーニングレベルを上げてもいいかもな」
タキオンがふむと頷き、マットに寝転がる。
足を抑えてやりながら俺は言葉を続けた。
「少なくともデビューまでは基礎トレだ。タキオンの最高到達速度は既に一線級だが、レースは速さだけじゃ勝てないからな」
彼女は逃げ馬じゃない。脚質で言えば先行がベスト、レース状況によっては差しが戦

術選択肢に上がるだろう。ならば、前方から抜け出す、または後方から追い上げる筋力が必要となる。

　出来れば持久力も鍛えたいところだが……こちらは並行強化しつつも、優先度は下げていいだろう。当面、タキオンの出走レース候補は中距離以下でまとめてある。長距離レースの対策にしてもクラシック級の１０月までに間に合わせられればいい。

　……それに、彼女はアグネスタキオンだ。可能な限り脚は使わせたくない。

「左右の捻りが足りてないぞ。呼吸は身体を起こしながら息を吐くことを意識しながら、もう２セット。インターバルは各１分だ」

「了……解っ！」

「――よし、腹筋そこまで。今日の予定は終了だな。ストレッチは念入りにしてから終わるぞ……お疲れ」

　意外に、と言ってよいのか、タキオンは練習には熱心だった。

　俺が決めたメニューに特に口出しすることもなく、黙々と内容をこなしていく様は、下手をすれば優等生に見えてしまった。

「君が私の要望に合わせてトレーニング時間を短く、その分、研究に回せるようにしてくれたんだ。時間中ぐらいまともに取り組むとも」

「昨日サボったのは？」

「ちょうど研究が捗っていてねえ。あそこで席を外すと、結果を取り戻すのに、より時間が掛かるだろうことが予想されたからさ」

悪びれもしない。というより、本当に悪気があったわけではないのだろう。

単純に彼女は、研究実験とトレーニングに掛かる合計時間を計算し、その場で実験を進めた方が結果的に総合計時間が短くなると判断しただけだ。

無駄を嫌い、効率化する。その考えは嫌いじゃない。強いて問題点を上げれば結果的にトレーニング時間を破っただけだ。

「君も中々まともな人間じゃないねぇ」

「……しかし。どこにいるかも分からないのは面倒なんだよな。タキオン、ＧＰＳでも付けててくれないか？」

「嫌だけど」

何を考えてるんだ、と濁った眼で非難される。君にだけはそのセリフを吐いてもらいたくないんだが――さりとて、トレーナーとしては担当ウマ娘の動向ぐらいは把握しておきたいものである。何せ、トレーニング時間中にタキオンが問題を起こせば一部の責任はトレーナーの俺にも降りかかってくるのだから。

そんな声を掛けながら冷却用にアイシングスプレーを投げてやると、渋面を浮かべた彼女が文句を垂れた。

「だから、前から言ってる通り君のトレーナー室を使わせてくれよー。それなら私は研究室の確保ができるし、君は私の管理ができる。まさに一石二鳥じゃないかな？」
　実験装置も君の部屋に置いてくれよ、いい提案じゃないかい？　なんてのたまうタキオンに頭が痛くなる。この一週間でタキオンが授業をサボった回数は２２回で、いずれも空き教室で化学実験をしていたことを確認している。先日も教室棟の一角がボヤ騒ぎになっていたのが記憶に新しい。
　そんな彼女にトレーナー室を引き渡してやれば、一ヵ月もしない内に俺の部屋がなくなるか、俺の職がなくなるかの二択になりそうだ。
　どうだい？　と自信気に聞いてくる彼女に、どうやったらそのように胸が張れるものかと疑問に思う。
「……少なくとも、合成実験をしないと約束するなら考慮する。フラスコも試薬も一般教室で使うもんじゃないだろ」
「えー？　理論と実験を切り離せって言うのかい？」
「シミュレーションでいいだろ。今やシリコンチップの中で研究する時代だぜ」
「インシリコ創薬の可能性については全く同意するが、家庭レベルの端末に実用性があるとは思えないね」
　君がスーパーコンピュータでも用意してくれるならそれでもいいけどねえ、等とぼや

きながら、アイシングを済ませたタキオンからスプレー缶を受け取る。なお、彼女の言うレベルの高性能端末を用意するのであれば、１日のリース料で俺の年収が丸ごとぶっ飛ぶ計算である。……スパコンは無理でも、一般端末をかき集めてクラスター化すれば何とかなるか？

「ま、どちらにしても金が要るんだが。タキオンの実家から引っ張ってこれないのか？　名家の御令嬢だろ？」

「うーん……実に率直な質問だが、その答えは否と言っておこうか」

「へえ。……もしかして実家と折り合い悪かったりする？」

それだったら悪いことを聞いたが、と謝りかけた俺に、彼女は高笑いして否定を掛けた。

「いや何、単純なことだよ。――今まで研究資金を無心し過ぎて、とうとう実の両親からも見放されかけてるというだけさ！　アッハッハッハ！」

１０秒ほど沈黙が続いてから。

俺の「……昼飯でも行くか」の一言にタキオンは小さく頷いた。

ちょうど昼時のカフェテリアには中高等部を問わず、多くのウマ娘達が集まっていた。一般に、ウマ娘は食事が好きだ。同年代のヒト種とほぼ近しい身体特徴を持ちなが

らも、食事量は個バ差あれ数倍～数十倍にも及ぶ。
そこで、トレセン学園では育ち盛りの彼女達の食生活を支える意味でも生徒用カフェテリアを併設していた。実に、トレセン学園に通学する生徒なら格安で良質な食事がお代わり自由（※）で提供されるという優遇っぷり。（※一部例外除く）
また、トレーナーである俺も福利厚生の一環として社食代わりに利用することが出来るようになっている。残念ながら生徒達ほど割安ではないのだが、日替わりランチがワンコインで食べられるのだから文句は言うまい。
「一部のトレーナーは担当ウマ娘の食事メニューまで厳密に指導しているらしいが……タキオンには必要ないだろう。もし必要であれば、献立ぐらいなら俺が作成するが」
「なあに、経口から補給するだけの行為にこだわりはないとも。……いや、心配せずとも栄養バランスは考慮しているよ？　その胡乱気な表情をやめたまえよ」
「食事と称してシリアルバーとサプリで済ませている訳ではないよな？」
俺の疑問に、タキオンはまさか。と首を振った。
「もちろん自炊しているさ。昨日は確か……そう、トマトとニンジンと鶏の胸肉だったかな」
「へえ、トマト煮込みにでもしたのか？」
俺の疑問に、タキオンはまさか。と首を振った。

「ミキサーに放り込んで飲み干したとも。無論、足りない栄養素はサプリメントで補完しているから安心してくれたまえ」

「ひょっとしてタキオン君はバ鹿なのかな？」

想像より3段階は人間性に欠けた回答だった。よくも自炊という表現を使用したものだ。それと比較するなら、ネアンデルタール人の方がまともに調理をしていたと言えるだろう。

「仕方がないじゃないか。昨日は特に実験が進んで、カフェテリアに来る暇もなくてね……いやあ、トレーナー君の研究資料は実に有意義な内容だった！　私の研究もまた一歩、いや三歩は発展したと言っていいだろう！」

上機嫌に笑うタキオンを横目に、思わず溜息が出てしまう。強くせがまれて5年前の資料と、そして、ここに来てからの知見を加筆したデータをくれてやったのだが、どうも裏目に出たらしい。

食にこだわりがない、というレベルではない。彼女にとっては自身の研究進捗こそが全てであり、他の全ての事象は一段階下の次元でしかないのだろう。

どうしたものか――と頭を悩ませていると、ふと目の前を漆黒が横切った。

タキオンより低い身長に、その腰まで伸びた長い黒髪。

そんな彼女を見た瞬間、つらつらと喋り続けていたタキオンの語り口が止まった。

「……つまりだ。君の仮定したようにウマ娘の両脚を四足動物の後肢に当たると考えると、中殿筋と大腿二頭筋の接続こそが――んん？　おや！　カフェじゃないか！」

そりゃここはカフェテリアだが。と返そうとしたところで、目の前の華奢な少女がこちらを振り向いた。金色の瞳が気だるげにタキオンを見つめている。

カフェーで青鹿毛と来れば、思い浮かぶのはただ一頭の馬だった。菊花賞から有馬記念、そして春の天皇賞のＧ１レースを全勝した割にいまいち知名度の低かった名馬……マンハッタンカフェ。

まあ途中挟んだ日経賞で入着できなかったり、故障判明前のラストラン凱旋門賞で惨敗していたり、残念なところも多いのだが。

とはいえ菊花賞、有馬記念、春天を三連勝したのは、シンボリルドルフとマンハッタンカフェを除いて他にいない。オルフェーヴルもナリタブライアンもゴールドシップだって成し遂げてない大記録だ。

当時の年度代表馬にも選ばれたジャングルポケットにも負けなしで、世代最強馬だったと言っても過言ではないだろう。

まあいずれの勝負にも、アグネスタキオンはいなかった訳だが。

「……アナタですか。それに、そちらは……ああ。トレーナーさんが付いたという噂は本当だったんですね」

「あ、ああ。と言っても先週からの話だけど」
　ぺこり、と頭を下げられる。少し憐れんだような感情を目に浮かべてこちらを見ていた。あれ？　もしかして同情されてる？
「いやあ、良いところに来たねカフェ。ちょうど昨日新薬が出来たところなんだ。是非とも君に協力して貰いたいのだが」
「……ですから、前にも伝えたように、アナタの実験にはもう参加しないと何度も言っています」
「まあまあ、そんなこと言わずに！　私と君の仲だろう？」
「アナタと仲良くなった覚えはありませんが」
「えー！　私と君、お互いハグレ者同士仲良く――はしていないが。理解し合って――も来ていないが。いないが、それなりに気は合っていたじゃないか！」
　胡散臭くショックを受けるタキオンに、マンハッタンカフェは小さく吐息を洩らした。このやり取りだけで、何となく両者の関係が掴めたような気がした。
　ぐるん、といきなりタキオンの瞳がこちらに回転した。赤い眼光が訴えかけるように鋭く尖って俺の視線を貫く。
「トレーナー君からも彼女を説得してくれないか？　ああそれと、ウマ・ヒト対照実験の為に君にも服薬して貰いたいのだが」

どう考えても無茶振りだった。大体、俺とマンハッタンカフェは今が初対面だ。しかし思わず視線を下に向けると、タキオンよりも一回り背の低いマンハッタンカフェと目が合った。

少し不安げに瞳を揺らす彼女は、どう見ても被害者のそれにしか見えない。

俺は大きく頷いてからタキオンを指差した。

「どうしても我慢出来なかったら一発ぐらいは殴ってもいいと思うよ」

「……ありがとうございます。……覚えておきます」

「あれー！　君、私の担当トレーナーじゃなかったっけ!?」

小声で足だけは勘弁してやってくれ。とカフェに言い含めると、彼女は薄く笑って、それから頷いてくれた。

アグネスタキオン３

「後方集団からじわっと差を詰めて、アグネスタキオンが前からは５，６番手。各バが３４コーナーの中間に向かいます。先頭はマイトリートで６００を迎えます。……ここでアグネスタキオンが早目２番手に上がってきました！　マイトリート先頭ですが外からはアグネスタキオン！　アグネスタキオン追い込んできた！　内に入ったのはデュオタージェ、前の３頭、しかし抜けたのはアグネスタキオン！　アグネスタキオン先頭でゴールしました！　勝ち時計は――――、上がり４ハロンは――……」

ジュニア級メイクデビュー戦、阪神芝中距離２０００は、当然のようにタキオンが圧勝した。当然だ。既に彼女の実力はジュニア級に収まるレベルをかけ離れている。仮にこのまま重賞レースに出しても、Ｇ１以上の限られた大舞台でなければ、十分勝ちの目はあるだろう。

前世と同じ道を踏むのであれば、タキオンはホープフルステークス（旧：ラジオたんぱ杯３歳牝馬ステークス）に進むことになる。

後に東京優駿やジャパンカップで勝ち鞍を挙げることになる『ジャングルポケット』

ＮＨＫマイルカップ勝ち鞍の『クロフネ』らを相手に２馬身ちぎって２分０秒８のレコードタイムを叩き出し、世間に鮮烈な印象を植え付けたのだ。なお、このレコードタイムは２０年経っても破られることはなかった筈だ。

中距離の括りで考えればこのホープフルステークスか、あるいはＧ３に格落ちするが、京都ジュニアステークス、京成杯あたりがタキオンの次走にふさわしいだろう。

そんなことをつらつらと話していたのは、阪神競馬場からの帰りの新幹線の中のことである。

俺が某・大阪名物の豚饅をつまみながら今後の展開を説明する一方で、タキオンはデビュー戦のデータを解析に回していた。ソフトウェアに対してスペック不足のラップトップがディスクから悲鳴を上げる。機体が熱を発して持ちきれなくなったのか、彼女は車載テーブルにそれを置きなおして、俺にじっとりとした視線を向けた。

「君の開発したシステムが素晴らしいのは認めるがねえ……些か要求スペックが過剰過ぎないか？」

「言ったろ、元々の設計思想は汎用機での使用を想定していたんだ。幾ら高性能でもノート端末じゃ動作に無理がある」

端的に言えば俺が作成したのは、出走映像データを元に選手の身体骨格を分析し、走行速度のデータ化、そしてパフォーマンスの精度を数値化するソフトウェアだ。数値化

したデータはデータベースに格納され、以後のデータ分析、比較に利用される仕組みとなっている。つまり、高精度な入力データが多いほど、高精度な解析が可能となる仕組みだ。

サンプルとして直近の重賞レースから見繕ってデータベースに突っ込んでいるが、あまりにもタキオンのレースに関係のないデータを入れると逆に学習精度が悪くなるのが難点だ。例えばダートのデータなんてあってもタキオンの走りには無駄だしな。

「言っておくけど、今は格納データが少ないからこの程度の負荷で済んでるだけだ。データベースが膨らんでいく以上、更に処理速度は落ちるぞ」

「えー。……まあ、君のお陰で解析作業がほぼ自動化されたことは素直に感謝しているけどさあ」

ぶつぶつと愚痴を言う彼女は、諦めたようにラップトップを放置して、新大阪駅で買ったばかりのチーズケーキを口にした。底面にレーズンが敷かれたヒト用のそれと違って、ウマ娘用にはカットされたニンジンが敷き詰められていた。

表面に焼き印がされたコック帽のおじさんに前世ぶりに挨拶をして、一切ればかりをタキオンの隙をついて奪ってやる。「あっ、こら！」と叱られながら口に運んでから、俺は手元のスマートフォンに目星をつけていたラック型のサーバ機を映し出した。

「今回の賞金で買っていいなら、ホスティング化してやれるけど」

「おいおい、レース賞金は私の脚で獲得したんだろう？　……幾らぐらいかな？」
「俺と君の賞金取り分が９割方ぶっ飛ぶかな」
「何を当たり前のように私の分まで勘定に入れているんだ」
「しょうがないだろ。研究には金が掛かるもんだ」
「私の研究費用も必要だろう!?」
わーたーしーのぶーんー！　と叫ぶタキオンを横目に眺める。
思い返せば、久々の大仕事ではあった。当初からタキオンのメイクデビューまでには開発を間に合わせようとしていたのだが、製作中に「あの機能が欲しい」だとか「こういった解析がしたい」とか平気な顔で要件を上げてくるウマ娘がいるのだから堪ったものではない。
最初に俺が「自動解析用のシステムを構築する」と言った時に彼女から懐疑的な視線が飛んできて、たまには度肝を抜かしてやろうと張り切り過ぎたのが良くなかった。β版での前ジャパンカップの解析結果を見たタキオンが、翌日には追加機能の要望一覧表を持ってきた時はその分厚さに吐き気を催したものだ。全部開発したけど。
何と、これが人月単価０万円の大プロジェクトだ。
このままＵＲＡに売り飛ばせばそれなりの値段が付くと思うんだが。
「それにしても、トレーナー君にそちらの才能もあったとはねえ」

「むしろこっちが本業だ。３０年前から」
「君は２０代だろう」
　おっと口が滑った。
　誤魔化すように咳払いを入れる。
「得意分野でぐらい研究協力してやろうってことだよ」
「おや、随分献身的じゃないか？」
「協調性が高い、ぐらいの表現にしてくれ」
　長いとは言えない付き合いの中で分かったのは、タキオンが最も生産性を発揮するのは薬理学、それも新薬の研究開発だということ。
　本来は数年単位の長いスパンで行うそれを、彼女の天才性と独創性、ついでに倫理性（のなさ）で極端に短い期間で基礎研究から臨床試験まで進めることが出来ている。
　以前は自身を含むウマ娘のデータ収集から行い、その結果を分析解析し、それから創薬に入っていたようだが……時間の無駄に過ぎる。
　今後の基本方針としてタキオンには薬理研究に集中させるつもりだ。そんなことを話すと、彼女はくつくつと噛み殺すような声を挙げた。
「くくっ。ま、私としては願ってもない話だが……ついでに、健康なヒト男性の被検体があればパーフェクトなんだがね」

「考慮しておこう。それより、話を元に戻して次走の件だけど」
　話を断ち切る形に、彼女は僅かに不満げにこちらを向き直った。
　そんな彼女に、以前から溜めていたレースプランを展開する。
「間隔がかなり空くことになるが、年末のホープフルステークスへの出バでどうだ？
その場合は弥生賞には出バしないことが前提だが」
「ふぅン、根拠はあるのかい？」
「クラシック三冠を獲りに行く布石だ」
　確たる根拠があるわけではないが、と前置きした上で俺はトレーナーノートを広げた。予定の上ではホープフルステークスの次に皐月賞、ダービー、菊花賞……と、いわゆる三冠レースを軸に挙げている。
　大前提として、無駄なレースに出るつもりはない。
「色々理由はあるが……一言で言えば、どうでもいいレースに時間も脚も使ってられないからな。最短距離でクラシック三冠を獲りに行くにはこうなった」
「時間は有限だ。その思想に同意するが、随分強気な発言だねえ」
「正直、ホープフルも出たくないけどな。このまま皐月賞に直行したいぐらいだが、出走制限を満たさないんだからしょうがない」
「デビュー戦の次走が皐月賞のウマ娘は聞いたことがないね」

皐月賞に出バするウマ娘達の前走は、弥生賞かホープフルステークスの経験バがほぼ全てを占める。あるいは、両レースとも出バしていることも十分あり得る。

コース・距離で言えば京成杯も候補に上がるが……前世においては京成杯の勝ち馬が皐月賞で連帯に絡んだケースが非常に限られていた。エイシンフラッシュが3着になった程度か。

「ホープフルか弥生賞かは正直どちらでもいいんだ。出走制限の緩さとレース間隔の長さでホープフルとしたが」

弥生賞から皐月賞の間は短い。

もしも弥生賞が稍重や重バ場になれば、次走までに消耗が残ることも考えられる。万一、タキオンの脚に余計な負担を掛けてしまいかねない。

「とはいえ、今までの内容は俺の考えだ。間隔が空くことを嫌って弥生賞コースってのもありだが……」

「構わないよ」

即答だった。

「価値の低いレースに出る意義は薄い、という点は私も同感だ。今はそれよりもやらなければならないことがあるからね」

視線を遠く、口元に薄い笑みを浮かべてタキオンはそう呟いた。

下手をすれば「デビューはしたんだからもういいだろう？」と言って研究生活に引き籠られる可能性も想定していたので、彼女の回答は上々だ。

安心した、という表現が正しいのか俺は胸を撫で下ろす。鳴り物入りでトレーナー業に就いたが、担当ウマ娘にヘソを曲げられてレースに出バすら出来ず……等という事態になれば、やよいちゃんに何を言われるものか。

しかし、これで年末のホープフルステークスまでは時間の確保が出来た。今後のトレーニングメニューと予定を詰めていかなければ……と皮算用を始めていたところで、こほん。という咳音。

「それで、もう半分の理由はあるのかい？」

不意を突かれたような問いかけに、俺の言葉が詰まった。

「何がって、クラシック路線に進む理由だよ。ティアラ路線に進んでもおかしくないと思っていたんだがね」

当然の疑問と言えた。

前世のアグネスタキオンという牡馬ならともかく、今世のウマ娘アグネスタキオンにはトリプルティアラを目指す資格がある。

朱色の瞳に見つめられながら、俺の脳裏には真っ当な回答が浮かび上がる。

『桜花賞が彼女の脚質に合わないから』というのは当然あった。１，６００ｍのマイル

戦ではタキオンの加速力を活かしきれない。中長距離戦に比べ、差し切る前に先行バに逃げ切られるリスクが高いだろう。ただし桜花賞を出走回避する手もあり、確固たる理由に挙げる程ではない。

『クラシック最終戦が菊花賞となる為、長距離対策に時間を取れる』というのも大きな理由の一つだった。中距離適正が高いタキオンだが、今後のトレーニングで持久力を高めていけば、３，０００ｍレースでも十分勝機はあるだろう。

……そんなことを幾らか説明しようかと思って口を開いた俺は、果たして、全く違う言葉を紡いでいた。

「見たかったから」

ん？　とタキオンが疑問を口にした。

思わず放ってしまったそれは、あまり口にするべき話題ではないんだけど、別にいいかな。とも思う。

言ったって分かりやしない。

それに、理由が聞きたいと言ったのは彼女だ。

――何だかんだ言って、俺が初めて彼女の名前を聞いたあの日からずっと思っていたこと。それを吐き出した。

「トレーナー君？　一体、何を……」

「――君が、ジャングルポケットもダンツフレームもクロフネもマンハッタンカフェも全員差し切って……いや、うん。そうだな」
「有り体に言うなら――君が言う果てになったところを、俺がずっと見たかったから、ってことさ」
　タキオンの両目が、僅かばかりに開かれた。
　耳がぴくりと動いて、釣られるようにベンゼン環の髪飾りが揺らめく。
　少し余計なことまで話し過ぎたかもしれない、と俺はそこで口を閉じた。
「私が果てになったところを見たい、か。――くくくっ。中々どうして、痛いところを突いてくるじゃないか」
「俺もトレーナーとして、あるいは研究者として協力するさ」
「そうか……うん、そうか！　――皐月賞までが勝負だな」
「今、何か言ったか？」
　何でもないとも。と笑うタキオンが、やはりモルモットが欲しいなあ。とこちらに怪しげな視線を向けてくる。
　……しばらくはタキオンとのトレーニング漬けの日々になるだろうし、その間に俺も薬学でも勉強しようかな。得体のしれない薬剤を飲むほどの勇気はないが、中身が知れた医薬品を少量試すぐらいならトレーナーの仕事の範疇だろう。いや本当に？

「ところでカフェはともかく、知らない名前が多いように感じたが……地方かどこかのウマ娘かな？」

なお、タキオンが続けた言葉には黙秘権を行使した。

アグネスタキオン４／××××××××０

メイクデビューを終えてしばらくの間、タキオンには当面のレース出走予定がなかった。次走をホープフルにした時点で、年末まで表に出る機会がないのは折込済だけれど。

よってここ最近は俺も彼女もトレーニングに精を出していた。

と言っても、今から行おうとしているのは走り込みでも、筋トレでもなく、座学だが。

俺がトレーナー室の前方に立ち、タキオンが座って講義を聴く形を取る。

意外……と言うべきではないが、レースに勝つには頭脳が必要だ。レースの展開を読む力や、勝負の駆け引きのタイミング、あるいはベストポジションの取り方……など。受験勉強のように知識が必要される訳ではないにせよ、思考能力を求められるのは当然のことだった。

あらゆる場面で結局、バ鹿では勝てないのだ。

もちろん、トレセン学園でも一般の中高等学校に該当するレベルの授業は行われている。単純に知識を深める意味合いだけでなく、前述の通り、ウマ娘の思考レベルを引き上げ、より高度なレースを行えるようにする。という目的の為だ。

「トレーナー君？　いや、確かに私も頭脳トレーニングが必要であることは承知してい

るが？　…その背後にある、夥しい数の教本類はなにかな？」
「心配するな、タキオン。ちゃんと解っているさ」
「分っていない気がするなあ」
　とはいえ、学園レベルの授業はアグネスタキオンという俊才には些か退屈過ぎるようだった。
　まあ、気持ちは分からないでもないにせよ、だからと言ってサボって実験されるとトレーナーとしては望ましくない。そういうのはG1を獲って周囲が何も言えなくしてからにしてくれ。
「問題レベルはちょうど、タキオンの頭脳に合わせて作成しているさ。まあ、つまり学園の授業みたいに寝る暇はないから安心してくれ。さて、講義開始だ」
「いやトレーナー君、別に私は進学したい訳では……」
「講義中だぞ、静かに」
「……はい」
「――文中ツルゲーネフの『他人を有効に罵りたければ、自分の欠点を相手のこととして並び立てればよい』……という言について一つの理解を述べてみるなら『自身の耐えがたい弱点を見つめ得る者は、あらゆる人間が持つ苦悩を弁え得る。よって他者の弱点を

痛烈に指摘できることに繋がる』訳で――」

「Ｌ―グリセルアルデヒドは分子内に不斉炭素原子をひとつ含む炭素数３の単糖であるが、その立体配置を次のように示すとき……」

「６世紀から７世紀にかけてユーラシア大陸東部では相次いで大帝国が生まれ、大陸東西を結ぶ交通交易が発達した。この大帝国時代に大陸中央部から東部に及んだイラン系民族の活動と、それが同時代の中国文化に与えた影響だが……」

「ｘｙ平面上で原点を極、ｘ軸の正の部分を始線とする極座標に関して、極方程式ｒ＝２＋ｃｏｓθ（０≦θ≦π）により表される曲線をＣとする。Ｃとｘ軸とで囲まれた図形をｘ軸のまわりに１回転して得られる立体の体積について……」

４科目を１時間で叩きつける圧縮授業後、どこかぐったりしているタキオンを次に連れてきたのは学園内の室内プール。全天候で全コース利用できて、おまけに飛び込み台まで付いた優れものだ。

「おーい、タキオン。身体がしっかり伸びきってないぞー」

トレセン学園の体育の授業にも使用される長さ５０ｍのプールは、授業時間外であれば自由に利用することが出来る。それを単に娯楽として泳ぎに興じる者もいれば、持久力強化の一環としてトレーニングも取り入れる者もいる。

当然、俺もタキオンも水遊びに来ているわけではない。今後のレースに向けての筋力・体幹・心肺機能の向上を見込んで、わざわざ人の少ない午前中にプール施設まで来ている訳だった。

そして、俺が特に着目したのはトレーニング中の怪我のしにくさだ。

地上と比べると、水の中では浮力の影響で重力が小さくなる。

つまり当然、身体に掛かる負荷も小さくなると言えた。

泳ぐことはあまり得意ではないのか、それなりの時間を掛けて往復を終えたタキオンがプールの縁(へり)で一呼吸を入れていた。

「はぁ、ふぅ……なあ、何もフォームまで気にしなくていいんじゃないか？　これは、あくまでスタミナ強化のトレーニングな訳だろう？」

「化学もスポーツも、正しい手順を踏んでこそ正しい結果が得られるものだぞ。ほら、残り１０往復。きっちり泳いでくるように」

時間がないぞーと囃し立ててやると「私が求めるのは陸上での速さであって、水中で限界を超えたいわけじゃないんだけどな!?」などと喚いてから、渋々水中に戻っていった。

「そういうわけで、今日も朝からトレーナー君の訓練が特別厳しくてねぇ。疲労回復に

糖分を求めるのは当然のことなのさ。分かるだろうカフェ君」

来週の併走訓練について事前に打ち合わせがしたい。としてトレーナー室に呼び出されたマンハッタンカフェは、得体のしれないものがあったとでもばかりにタキオンのティーカップに視線を向けていた。

室内のソファーに深く持たれ掛かるようにした彼女が、ドボドボと個数も確認せずに角砂糖を琥珀色の液体に落とし込んでいく様を、ドブを見るような冷えた視線が刺している。

「……それが、紅茶に溶けきらないほどの砂糖を入れている言い訳ですか？」

「理由と表現してほしいなぁ」

明らかに飽和状態を超えた紅茶の水面量が上がっていく中、マンハッタンカフェは見るに堪えないとばかりに自身の手元にあるコーヒーカップに口を付けた。タキオンのトレーナーが用意してくれたそれは、思っていたよりも、しっかりとした甘味とコクが感じられた。

間違ってもインスタントの味ではないのは確かだ。

「……おいしい」

思わず感心したような声を出すと、彼女のトレーナーが小さく笑った。

「ああ、それは良かった。タキオンから君がコーヒー党だと聞いてね。普段はインスタ

ントか缶コーヒーで済ませるんだけど、今日は特別、自宅から豆を挽いて来たんだ」
「……やっぱり。スプレモですね？」
長い前髪の隙間から、いつもより柔らかい視線がトレーナーを捉える。
彼女の周囲には、コーヒーの苦味を好むウマ娘は少なかった。
「お、わかる？　アメリカに居た頃はよく飲んでいてねえ、懐かしくなってこっちでも買ってしまったよ。まあ、うちの担当には不評だけどね」
ちらりと栗毛を見る。
彼女はガリガリと音を立てながらティースプーンをかき回していた。
「君らの嗜好は否定しないが、紅茶の香り高さと比べると、どうにも興味が惹かれないねえ」
そういうセリフは、カップ底に溜まった砂糖を混ぜている時に言わないでほしい。
じろり、と金色の瞳が呆れたような視線を向ける。
「……太っても知りませんよ」
「なぁに、他の部分で調整すれば訳ないとも。なあトレーナー君？」
地獄のような糖分の塊に口につける直前に、にこりと笑みを浮かべて頷く。
誰が調整すると思っていやがる。
「タキオンがそういうなら、昼食用のフルーツサンドはなしにしようか。食パンでも

齧っとく？」
「――おっと、誤って紅茶に砂糖が入りすぎてしまったようだ。砂糖の摂り過ぎは身体に毒だからね、勿体ないがこれは処分しようかな」
「よろしい」
冷蔵庫から本日の昼食を出してやると、一転して態度を改めるタキオンに頷く。
一連のやり取りをぽかんと見ていたマンハッタンカフェは、いつもの無表情な顔に少しだけ驚きの色を滲ませていた。
そして、嬉しそうな顔で苺のサンドイッチを頬張るタキオンに、何とも言えないような視線を向けている。
「……まさか、タキオンさんの食事まで用意されているんですか？」
「最近はトレーニングの負荷を高めているから、かな。補食の意味も込めて、一部の食事はこちらで用意するようにしたんだ」
毎食ミキサーで済まされては困る、という側面もあった。
栄養素的には問題がないとしても、アスリートとしては噛む力――すなわち咬合力が鍛えられないのは由々しき事態だ。
歯を食いしばることで運動野に刺激が伝達され、そして骨格筋の反応に影響を及ぼす。

とある実験では、歯の食いしばりそのものが数パーセントもの筋力増大に繋がったとされるデータまで上がっている。

つまり、噛む力は運動能力上で非常に重要なファクターであり、日ごろの食事でも意識していかなければならない。食材をミキサーに掛けて流し込んで終わり、とする訳にもいかないのだ。

「――それに、例えばレース中に姿勢のバランスが崩れたときには、抗重力筋が作用して姿勢を元に戻そうとする訳だけど、それには咀嚼筋も関わっていてね。つまりバランス能力と咀嚼筋には強い関係がある訳で――って。ちょっと専門的な話になってしまったか」

つい、いつものタキオンとの会話のように接してしまった。

見れば、理解が及ばなかったようにマンハッタンカフェは目を白黒させていた。

ごめんごめん、と軽く謝ると、彼女はどことなく納得したような顔つきでこちらを見る。

「あ、いえ……何となく、あなたがタキオンさんを担当している理由が分かったような気がします。……ちょっと、タキオンさんに似ていました」

「お互い理屈屋ではあるからなあ」

細かく言うなら俺が理論を重視するのに対して、彼女は実践ベースで動く傾向ではあ

るのだが。
まあ結局、手綱を引かなければならないのは俺の方だということなんだけど。
マンハッタンカフェとそんな話をしていると、ふと彼女の前髪に隠れた視線が、残りのサンドイッチが入ったバスケットに伸びていることに気付いた。
「もし昼食がまだなら、君も食べるか？　フルーツサンド、少し多めに作ってしまったんだけど」
「……いいんですか？」
ちらちらとフルーツに視線が行きながらも、遠慮しているのか、マンハッタンカフェはこちらを見上げて戸惑っている。
「コーヒーとの相性は悪くないと思うぜ。というか、甘ったるい紅茶に甘いフルーツサンドを合わせてる奴がイカれているんだが」
「なあ、聞こえてないと思ったら大間違いだぞ――え。いやいや、残りは私のお代わりじゃないのか？」
「トレーナーさんにそう言って貰えるなら……いただきます」
「んん？　カフェ？　なあ、カフェってば。君、私の友達だろう？　何で無視するんだい？　ちょっと、そのバナナの奴は私まだ食べてな……」
「美味しい……この生クリーム、口当たりがいいですね」

「あー!?」

タキオン、うるさいぞ。

「いやあ。マンハッタンカフェみたいに味が分かる子がいると、作り甲斐があるなぁ」

「……あの、カフェでいいです。私、そう呼ばれることが多いので」

「そうか？　確かにちょっと長いけどな。またいつでもコーヒーを飲みに来てくれていいよ、カフェ。茶菓子も用意しておこう」

「……ふふ、ありがとうございます」

「トレーナー君？　あれ、私にはトレーナー室には入るなって言ってなかったっけ？君の唯一の担当ウマ娘の私にそう言ってなかったかな？」

だってお前、この間やめろって言ったのに室内で実験してたじゃん。

「以上のように、最近は訓練期間としています。トレーニング詳細は先ほどの報告書にまとめているので、確認ください」

週に一度の業務報告とは別に、今後の予定について考えを聞きたい……ということで呼び出された理事長室では秋川やよい理事長と、たづな女史が待ち構えていた。

紙ベースにまとめた直近の活動録をぺらぺらと捲るたづなさんが、ふぅむ……と内容をさらっていく。要旨を一通り確認したのか、資料を閉じてこちらに向き直った。

「随分、トレーニングの強度が高いですね。この内容ですと、通常であればシニア級の生徒達がこなすものと同レベルに見えますが……」
「彼女のポテンシャルの高さからすれば十分耐えうると判断しています。ま、もちろんトレーニングに帯同した上で、怪我には重々注意していますけどね」
「……なるほど」
　最も怪我を引き起こしやすい走力トレーニングは普段はフォームチェック程度として、室内での訓練を基本としている。
　当然、忘れない程度に併走訓練や模擬レースには出すようにしているが。
　そんな俺の回答に得心が行ったのか、やよい理事長が元気よく椅子から飛び出してきた。
「納得！　あなたがあのアグネスタキオンを担当として連れてきた時は驚いたものだが、上手くやれているようで良かった！」
　理事長の一声に、確かに。とたづなさんが同意する。
「彼女のことは我々も悩んでいました。……あのままだと、進退問題にもなりましたから。担当トレーナーさんが付いて安心です」
　そういえば、当初出会ったときのタキオンは退学を検討している節があった。あれほどの素質を持ったウマ娘がデビューもせずに退学となれば、控えめに言っても競バ界の

損失だ。
理事長やたづなさんもそれが分かっていたのだろう。
本心から安堵したように胸をなでおろしている様が見て取れた。
そんな会話もそこそこに、理事長がこちらをみて扇子を開く。
「本題！」と書いていた。
わざわざ用意したんだろうか。
「ふむ、アグネスタキオンは一緒ではないのか？」
「トレーナー室で不貞寝してます。必要なら連れてきますけど」
えぇ……とでも言いたげなたづなさんを他所に、秋川やよい理事長は鷹揚に頷いた。
大きく息を吸うと、こちらに不敵な笑みを浮かべた。
「要望っ！　がある！」
命令でも提案でもなく、要望と来た。
続きを促すように黙っていると、彼女が報告書に指をさす。
「僅か一ヵ月の内に、あなたは無事に1人のウマ娘をデビューまで導き、そして新バ戦を1着で通り抜けた！　まさに名トレーナーと言っていいだろう！」
「言い過ぎだと思うけど」
メイクデビューを終えただけだというのに、偉業でも達成したとでも言わんばかりの

褒めようだ。
　いや、もちろんデビューが出来ない子もいれば、中々勝てないまま、未勝利戦にしか出れずに引退する子たちが大勢いることも分かってはいるけど。
「それは、タキオンの脚あってのもので……」
「謙遜っ！　は、不要！　少なくともこの学園内に、アグネスタキオンをデビューまで連れて行くことのできたトレーナーは他に居ない！」
　相性の問題じゃないかなあ。と思いながらも、話の続きを待つ。
「そこでだっ！　端的に言えば、君に頼みたいことがある！」